

女性研究者・技術者委員会ニュース

No. 29 2016年10月31日

連絡先：日本科学者会議全国事務局 Tel：03-3812-1472、Fax:03-3813-2363
e-mail:zenkoku@jsa.gr.jp ホームページ：<http://www.jsa-tokyo.jp/woman/index.html>

目次

- 1 特集 日本科学者会議/第21回総合学術研究集会 分科会「科学・技術(学問)をめぐるジェンダー問題～女性研究者のライフコース：出産、子育てと研究遂行の葛藤」
- 2 2016年度 第1回女性研究者・技術者委員会 議事録
- 3 日本科学者会議 女性研究者・技術者委員会運営のための申し合わせ

1 日本科学者会議/第21回総合学術研究集会 分科会「科学・技術(学問)をめぐるジェンダー問題～女性研究者のライフコース：出産、子育てと研究遂行の葛藤」

①開催日時・場所：9月4日午前，B207教室

②コーディネーター：朴木佳緒留（女性研究者・技術者委員会 委員長）

③プログラム

*09:30～09:40 朴木佳緒留：本分科会開催の趣旨説明

*09:40～10:00 小畑千晴：子育てをめぐる女性研究者の現状と課題—臨床心理学の立場から

*10:00～10:20 服部敬子：3人子育て中の『問題』生起とその克服

—同僚と保育園，ママ・パパ友に支えられて—

*10:20～10:40 小尾晴美：研究職1年目のWLB上の課題

—『保育労働』を研究対象にする女性研究者の立場から—

*10:40～11:00 岸田未来：出産・子育ての期間をどう考えるか

—子育て中の女性研究者の立場から—

*11:15～13:00 総合討論

<分科会まとめ>

パネルディスカッション方式で4名の登壇者に、女性研究者が直面する「子育てと研究（職業）の両立」について、現状の問題点および課題克服に向けての展望を報告いただきました。「両立」問題として配偶者や家族との葛藤や協力が論点として取り上げられる機会はそれほど多くないため、議論の新鮮さを共有できたと思います。その後には、フロアーからの意見も交えて活発な意見交換ができました。「女性研究者」という場合、「女性」をとらえる視点について再検討が必要、「子育て支援」に関わって女性間の対立を生む場合もあり、その克服が必要などです。今後には「女性問題」としてではなく、「子育て問題」また「介護」も含めた「生活問題」としてとらえ、男女を対象とした課題設定をする必要があることを確認して、議論を締めくくりました。

分科会参加者は28名で、多くは女性研究者でしたが、男性も2名、研究者以外の職種の方も参加いただき、また参加者の内から3名の会員登録もあり、「成功」と言ってよい分科会でした。これも、皆様のご協力があったことです。この場をお借りして御礼申し上げます。

(朴木佳緒留 女性研究者・技術者委員会 委員長)

<報告者から一言>

①徳島文理大学 小畑千晴さん

この度初めて日本科学者会議に参加し、当日はやや緊張しながらも、朴木先生始めフロアの皆様のすべてを包みこんでくださるような優しさのおかげで、何とか発表することができたと感じております。また活発な意見交換が行われたことで、様々な刺激を受けることができました。

とりわけ、今回のテーマである「女性支援」のいう女性とは誰なのか、支援されるべき女性とは誰なのか、更に、それと深く関係する家事育児や生活を共にするパートナーとの関係の在り方にまで及ぶことに改めて考えさせられる機会となりました。そして、この会の最後に、朴木先生より「ここでの議論は、社会一般からみるとかなり進んだ議論である」との一言が私に胸に深く刻まれました。女性研究者の別居婚や男性の家事育児の手伝いは、大学関係者にとってはそれほど珍しくないため、当然のこととして理解していた自分に気づきを与えてくださいました。

今後は、女性(研究者)の両立問題という深遠なる問いに、長く向き合い続けてこられた諸先輩方と共に向き合い続けていけたらと思っております。素晴らしい機会を与えて下さり有難うございました。

②京都市立大学 服部敬子さん

今回の分科会では、「3人子育て中の「問題」生起とその克服—同僚と保育園、ママ・パパ友に支えられて—」というテーマで、遠距離別居婚から単身育児、難治性疾患の発症と悪化過程、子どもの学校生活における「問題」生起という自身の体験を振り返りながら、経済的な支援では解決が困難な事態において求められる社会的資源をめぐって話題提供をさせていただきました。

研究の継続が可能な経済的、時間的な支援は不可欠ですが、子どもの発達にもなって子ども自身のニーズや生じる問題もまた変化します。私の場合は、質の高い保育園で保護者会活動等を通じて構築されるママ友、パパ友といったインフォーマルな支え合い関係がきわめて重要な意味をもつことを実感してきました。祖父母やファミサポに子どもを「預ける」だけでは、大人と1対1の関係よりも友だちと遊ぶことが好きになる幼児期後期以降の子どもたちのニーズに応えられないということを理解しておく必要があると思います。

フロアからの貴重なご意見をいただき、「女性」支援、「子育て」支援、という名称についても再考する機会を得ました。性のあり方も多様であり、「妊活」期間の大変さや学童期以降の生き辛さの問題も知られるようになってきた現在、従来の括り(線引き)はとすれば不毛な対立関係を先鋭化させることになりかねません。ライフステージのときどきに必要な支援を行うにふさわしい名称の検討と、参与する集団における合意形成の努力が今後とも求められると考えています。

最後になりましたが、分科会当日に保育をお願いした子どもが、長時間楽しく過ごせる申し分のない環境をご用意いただきましたことに深く感謝を申し上げます。

③摂南大学 岸田未来さん

今回の分科会では、「出産・子育ての期間をどう考えるかー子育て中の女性研究者の立場からー」というタイトルで、主には自分の子育て経験をもとに、家事・育児と研究遂行の両立にとっては、夫婦間の理解と協力が必要ではないのかという点を中心に報告を行いました。報告内容は次の通りです。

現在はかつてと比較して、女性研究者・技術者が働きながら子育てを行うことは容易にはなっており、そのようなロールモデルも見つけやすい状況となっています。しかし他方で、やはり家事・育児の負担という点からみれば、妻の方に偏りが大きく、それが女性側への物理的・精神的な負担を大きくしています。子育ては、そもそもエネルギーを相当に費やすライフイベントであるので、その負担を根本的になくすことは不可能ですが、夫婦間で協力と分担を行うことによって、夫婦ともにストレスが少なく、子育てを楽しめる期間とできるのではないのでしょうか。その実行のために、個人的には、夫に4か月の育児休暇を取得してもらい、出産直後より夫婦共同で育児を行ったことが、夫婦間の話し合いや相互理解にとって非常に有効でした。ただし、夫婦間でいくら家事・育児を上手く分担できたとしても、職場の研究・教育条件そのものが研究者間の競争を促し、仕事の負担を増やしていく状況では、根本的な問題解決にはつながらないと思います。やはり、社会全体で仕事の負担を見直す、ワークライフ・バランスを追求する行動も、特に今現在では強く求められているのではないのでしょうか。

以上が報告内容ですが、私自身は、他の報告やフロアからの質問とコメント、および分科会全体の議論から多くの刺激を受けました。分科会が終わって得た感想は、子育てをする女性研究者への支援は確かに切実に求められていますが、それは問題解決の入り口であり、決して最終目標ではないこと、子育て問題の解決を女性側だけに求めるという、そもそもの設定が問い直される必要もあり、ジェンダー問題や地域社会と子育てとの結びつき、研究者間での格差拡大（正規・非正規）がかつてなく大きくなっていること、文科省の支援策のあり方、など複雑に絡み合った問題群を粘り強く解きほぐし、一つ一つ解決してゆくことが、長期的に求められていると感じました。これらのことを踏まえながら、改めて自分自身の研究や社会的活動のあり方を見つめ直したいと思います。

④名寄市立大学 小尾晴美さん

今回、私は「研究職1年目のWLB上の課題ー『保育労働』を研究対象にする女性研究者の立場からー」というテーマで、主に、以下の2点の内容について今年度から研究職に就いた自身の経験的な事例としてお話させていただきました。一点目は、院生、若手研究者にとって、学費の負担・奨学金の返済・就職難などがライフコースにとってどのような影響を及ぼすのか、といった内容です。二点目は、常勤職を得た今日における家庭生活やキャリア上の問題についてです。

分科会の他の報告者のみなさんからは、「出産・子育て・介護と研究遂行の間にある葛藤および克服方法」という中心テーマにふさわしく、それぞれのご経験から具体的なノウハウや教訓、社会や職場環境の課題等について学ぶことができました。現在の私は、就職出来たとはいえ、仕事に慣れるのに四苦八苦しており、保育環境にも不安がある中で、それほど簡単には出産に踏み切れない…と漠然と悩んでいる状況でした。そのような中で、子育てと大学教員のキャリアを両立しておられるみなさんのご経験に、一つのモデルとして希望を与えていただいたと思っています。

フロアからはたくさんのご発言があり、意見の内容も、地域での子育て支援のあり方からライフコースの選択の問題、マイノリティの問題など、多様な次元、スケールから女性研究者をめぐるジェンダー問題が論じられ、大変示唆に富んだものでした。

今回の分科会では、専任のポストについての女性研究者の問題が中心に議論されました。しかし、他方で、研究者のポストが減少し、任期制に置き換えられる中、研究面でも経済的な面でも先の見通しを立てることが難しい状況下で研究生活を続ける女性研究者の実態があります。これまでも女性研究者・技術者委員会に取り上げられてきた問題ですが、いわゆる「非正規」雇用の研究者の場合、出産・子育て・介護と研究遂行の間の葛藤のレベルがより高いと考えられます。こういった問題にも、同時に取り組んでいく必要を改めて感じています。

分科会全体として、女性研究者のライフコースの選択をめぐる問題を正面から取り上げ、課題を明確化して下さる機会として、大変貴重なものでした。貴重な機会を与えていただいたことに、感謝申し上げます。今後も、性別を問わず、生きやすく、自己実現できる社会を目指し、研究と人生の歩みを進めていく所存です。



<参加者感想>

①神戸大学 ロニー・アレキサンダーさん

大学に勤めて27年目になりますが、その大部分は「おじさん」に囲まれて仕事をしてきました。日本科学者会議はきっとまたまた「おじさん」の会だと思って、今までは避けていました。しかし、今回はお誘いをいただき、この分科会に出席してみることにしました。

プログラムの内容を見たとき、幾分かは「またかあ」と思いました。今日、冒頭のあいさつの中で朴木先生が指摘したとおり、このテーマは昔から議論されてきたものです。しかしながら4人の報告を聞くと、それぞれは特徴があって面白かったです。新鮮さを感じることも発見もありました。

しかし、少々驚くこともありました。確かに報告の中で「これは女性個人の問題(だけ)ではない」という発言はありましたが、落ち着くところはやはり個々人の女性の生き方のような印象でした。フェミニズムが問題視する公私の境界線や個人的なことの政治性などという(私にとって根本的な)考え方が抜け落ちていたような印象です。

フロアから発言をさせていただきましたが、結論からいうと「女性とはなにか」を問い直す必

要を感じました。女性研究者支援の必要性は痛感しているつもりで、それに対しては決して反対ではありません。しかしながら、今の日本において、「女性」というと、「結婚して、夫と子どもと暮らす人」というイメージからはみ出ている人は大勢います。身体的・精神的・社会的な「女性」でも、シングルマザーや独身女性、子どもを持っていない女性が多いし、LGBTIQのように身体・精神・社会的役割などが一致しない「女性」もいます。また、私のように「女性」・「外国人」・「セクシュアル・マイノリティ」とカテゴリーをまたがっている「女性」は少なくないだろうと思います。

女性研究者は子育てと研究の両立が大変で研究を続けるために支援が必要だということは否定しませんし、支援をすべきじゃないとは思いません。しかし、日本科学者会議を含めて、大学というところは社会より先進的な取り組みを試みることができる社会的空間だと思います。そういう意味で、女性研究者支援の目指すところはよりインクルーシブ(包摂的)で生きやすい社会だと考えるのです。社会が変わらなければ、女性の立ち位置は変わらないでしょうが、大学という場、そしてその場から発信する女性研究者支援の「政治性」を忘れてはいけません。女性の多様性を認識し、それぞれの女性にとって生きやすい社会づくりがすぐには実現できないかもしれません。しかし、今から言わなければいつまでたってもできないでしょう。

今回の分科会は、だれが、だれを、どのように、どうして支援するかを考えるととても良い機会でした。私自身も答えを持っていませんが、これからも探り続けていきたいと思います。

ありがとうございました。

②大阪支部 寺岡敦子さん

それぞれに研究という仕事への熱情、障害との葛藤、そして達成された喜びなど熱く感じられるお話でした。女性研究者相手の相談員を勤める臨床心理学研究者の報告では、相談件数の増加傾向、家庭の対人関係によるストレスが多く特にパートナーとの相互理解が大きな要因であることなどが話されました。他の報告者からも、研究生活とパートナーとの共同の難しさが語られ、それを一人で抱え込み悩むタイプの人、開き直って妻が取り仕切る役、夫は従う役と割り切って乗り切った人、夫妻ともに体を壊し地域のママ友、パパ友らとの連携で乗り越えた人など、多彩な経験談が聞かれました。一方で未出産のシングル女性の不公平感に配慮し、連携してネットワークを組むようにという指摘もありました。

社会的な支援策として、1)出産と子育てが重なる時期の研究生活は女性だけでなく大学院生など男性にとっても経済的な負担が大きく、研究補助金などの支援が望まれる。経済的余裕があれば、家事の一部を外部化できる。2)研究現場に競争原理が持ち込まれた中で男性にとってもストレスが大きい。本来の研究生活に戻すべくスウェーデンなどを見倣って、ワークライフ・バランスのとれる社会に改めてゆくべきと提起されました。

私自身は同じ専門分野(薬)の女性の早期離職傾向が強いことから、初等中等教育でジェンダー問題にもっと取り組んでほしいと願うことがあり、会場に教育専門家が朴木先生はじめ参加されていることに意を強くしました。

③兵庫医療大学 桂木聡子さん

私は、長く薬剤師として臨床の現場で仕事をし、5年前から大学に籍を置いています。薬剤師という仕事は、女性がとても多い職場で、仕事もやろうと思えばきりが無いほどあり、常に新しい薬や治療法、保険や介護制度等に関してのアップデートを図る必要から自己研鑽にも取り組む必要があります。その中で子育て・介護をしながら働く女性は大勢います。皆それぞれ工夫をし、職場や同僚も協力します(程度の差はありますが)。そして、それでもしんどくなったときには、お休みすること(休職、退職も含めて)もあります。

今日のお話を聞いていて、いくつか気づいた点と、考えさせられたことがありました。女性研究者と薬剤師の違い。圧倒的な数の差。女性研究者がもっと、もっと増えたなら、もう少し職場などの社会環境が変わってくるかも知れません。そのためには、今の問題を解決しなければ、増えないのかも知れません。卵と鶏の話のようですが、研究者の魅力を発信して、まずは同僚を増やすのが良いのではないのでしょうか。それと、お話の中でもフローアからも、私的・公的の境のお話がありましたが、私的な問題も事例としてまとめ公的な問題にすることも重要だと思いました。そして、ジェンダーの問題は、女性だけで解決できるとは思いません。問題を可視化して解決策を練ることも重要だと思いますが、これから問題が起こらないようにするためにも、多様性の教育を子どもの頃からする必要もあるのではないかと考えています。

④姫路大学 濱田格子さん

報告者のうち3名は、研究と子育て(子を持つこと)についての悩みや葛藤、工夫などを自分自身の経験から語り、1名はそのような女性研究者の相談を受ける立場からの報告であった。私は地域子育て支援施設において母親の相談に携わっていることから、そこでの相談や対応との比較から感じたことを述べる。

まず、地域子育て支援拠点での相談内容と大きく異なるのは、夫との同居や馴染の土地(地縁・血縁がある)ということはずしも重視しない点である。地域では夫の異動で自分が仕事を辞めた例は多いが、自分の仕事の都合で乳幼児を連れて別居という事例はなかった。研究者の場合、別居結婚のロールモデルが多いこと、研究を続けるためには男女ともに広範囲で職場を探す必要があることが考えられる。地域での相談と共通する点は、親になることで自分のしたいことが思うようにはできない不自由さとともに、夫より負担が大きいことの不公平感を感じているという点である。

地域子育て支援における相談援助では、親が自分の悩みを整理したり、受け容れたりするための関わりだけでなく、他者とのつながりを作るための関わりを重視する。子育て・子育てには地域の人や組織等とのつながりが欠かせない。地域子育て支援と同様に、女性研究者の相談に対しても、心理的なサポートだけでなく、地域情報の提供や他の親子や支援者とのつながり作り、さらには子育てを支える地域資源の発掘や育成といったソーシャルワークが必要ではないだろうか。近年、大学は地域とのつながりを求められるようになってきているが、そこで働く研究者自身も地域

とのつながりを必要とする存在なのである。これは、今回の服部氏が保護者会活動に助けられたという報告からも伺える。

女性研究者が安心して子育てしつつ仕事を続けるためには、保育所の充実や男女とも育休を取得するといったこととともに、地域作りも含めたソーシャルワークの視点が欠かせないと思う。

⑤市立伊丹高等学校教諭 中村 功さん

9月4日(日)会場の龍谷大学深草校舎の、地下教室に入って、まず感じたのは「男性がいないなあ」ということでした。当日、この分科会に参加されていた5,60人の中で、男性は私を含めて2人だけだったと記憶しています。ジェンダー問題は、男女で考えていくべきことですが、この状況が、すでに潜在的な課題を示しているのではないかと感じました。つまり、男性側の意識です。

内容は女性研究者が向き合う仕事と家庭の両立における現状や課題が中心でしたが、各パネラーの先生方の発表の中で何らかの形で呈示されていたのは、「パートナーの存在」だったと思います。先生方のパートナーも、お話を聞く限り、かなり温度差があるように見受けられました。積極的に家事、育児に取り組んでおられる方、妻の仕事は認めるが、家事はしようとならない方。また、妻の働きかけによって、夫が動いている部分もあるのかなという印象も持ちました。私も、福祉の仕事に携わる妻の勧めで、2人の子供にそれぞれ3カ月の育児休暇を取った経緯があります。小畑氏が予稿で書かれている「男女二人の共通の問題」また「夫婦の両立」の観点から、ワークライフバランスが話し合われることが重要だと、改めて認識しました。

現在、日本での男性の育児休暇の取得率はまだ、2パーセントで、内容的にも大半が1,2週間程度というのが現状です。男女共同参画は進められてきているはずなのに、男性の意識がそれに全然、追いついていないと感じざるをえません。しかし、小畑氏の「女性が自分自身に過度の負担感を持っている」という発言には、非常に新鮮な印象を受けました。女性の「私が…」という思いが、男性の意識の遅れを、かえって助長している部分もあるのかもしれません。男女が家庭で話し合える民主的な状況を作り、意識の改革を進めていくしかないのでしょうか。これを一朝一夕で達成するのはむずかしいですが、教育や様々な働きかけで、50年かかるところを30年、20年と短縮していくことは可能ではないでしょうか。

各先生方がパートナーを始め家族との関係、子供の学校や地域での人間関係、御自身の働き方等、様々な調整を行いつつ、研究者として活躍されている姿には、本当に、しなやかな力強さを感じました。小尾氏は「適切なロールモデルがまだない」と言われましたが、是非、御自身の姿を次世代の女性研究者に、強力なロールモデルとして伝えて頂きたいと思います。私はワークライフバランスとは、仕事と家庭生活の間に線を引くことではなく、家庭生活 - 子供の世話をしたり、食事を作ったり、掃除をしたり…といったことと、仕事は等価値にあるとみなすことではないかと考えます。男性も女性も本当の意味で充実感を感じる幸せな人生を実現するための、一つのキーワードが、ワークライフバランスではないでしょうか。私も、この研究集会で得たことを糧に、生徒たちが今後の自分の人生を、少しでも考えるきっかけになるような人権教育授業を実

践したいと思います。今回は、このような充実した内容を聴講する機会を頂き、本当にありがとうございました。

⑥京都教育大学 井上えり子さん

生活と仕事の両立を社会的に支えるために、どのような支援が必要なのかを明らかにし、施策を実施するための合意形成を行うこと、ここに女性研究者支援の課題があるように思います。私は、この点についてダイバーシティー（多様性）をキーワードとして考えていくことが必要ではないか、という旨の発言をしました。

戦後日本の経済は、終身雇用と年功序列を特徴とする中高年男性中心の組織を形成し、大学も同様に組織的に女性を排除してきました。しかし、その前提が崩れつつある現在、グローバルな経済競争に勝ち抜くためにダイバーシティーを導入しなければならないという流れの中で女性研究者の登用が進められています。日本では、ダイバーシティーは男女を含めたあらゆる人々の平等を推進することよりも経済成長を支える人材として女性や外国人を活用しようとする文脈の中で用いられているように思います。従って、女性研究者が増加しても彼女たちが必要としている支援の内容を明らかにしたり、支援に対する合意形成と施策を進めていくことは後回しになっています。

本分科会では、子育てと仕事を両立している女性、出産に踏み切れない女性、子どもを持つことを諦め仕事を選択した女性など異なる立場の女性の発言があり、多様な女性の実情を共有する良い機会になったと思います。また、性的マイノリティーの人々の問題についても喚起を促す発言がありました。今回は触れられませんが、合意形成を進めていくためには、女性だけでなく男性との対話が必要となります。加えて、日本の働き方の最大の問題である長時間労働を見直すことなしに、生活と仕事の両立は成り立ちません。研究職・技術職も含め社会の働き方自体を迅速に変更することが必要であると思います。



<アンケートより>

①運営

・さまざまな立場のパネリストの話をうかがえると同時に、フロアも含めた討論の時間もたっぷりあってよかったです。

②内容

・朴木先生が論点を絞ってくれたので、わかりやすかった。
・フロアからの意見が活発に発せられた。
・非常に身近な問題であり、改めて社会を変えていく必要があると感じました。50年前からかわっていない問題ですが、100年かかる問題という発言もありました。あきらめずに様々な切り口から考え続けて行動に移そうと思います。

・女性研究者の研究と家庭の両立問題は男性の教育問題であり、国の制度の問題であると感じた。子育てサポート制度は現実と乖離していると思う。その中で、4名の報告者は真によく頑張ってこられたと、心から敬意を表す。

・ご自身の生活(就職、結婚、家事、育児、介護)や相談室などの支援施設での経験を具体的にうかがえたので、興味深かったです。

・このような意見を社会にどう反映していけるのが問題。安倍政権の「女性活躍社会」はこのような考え方をつぶし、画一的なあまり考えない人を作るような気がする。

③今後のシンポジウム・集会・交流会のテーマ(要約)

- ・雇用、レディスデイ、女性専用車両等、種々のポジティブアクションを「逆差別」とする見方へのアプローチ
- ・男性の意識・教育の分析と男性の意識改革成功例・失敗例、外国の事例→男の育て方
- ・ゆとりづくり
- ・シングル、子育て支援等、女性のダイバーシティ

<交流会(ランチセッション)報告>

分科会終了後、同じ教室でランチを食べながらの交流会を行いました。参加者数は28名(内訳女性26;男性2)、会員21名(地域 京都5;大阪7;兵庫1;岡山1;徳島1;東京5;北海道1)、非会員7(京都1;大阪2;兵庫2;東京1;不明1で当日2名が入会されました。)

①会計報告

収入:会費(26名*)13,000円

JSA委員会費補助3,350円 計16,350円 *2名は弁当持参

支出:軽食(業者発注)8,000円

お菓子・飲料・食器等(市販品)8,350円 計16,350円

②世話役:京都支部 (企画・準備:清水民子・福島知子 受付担当:上野勝代)

③世話役付記

- ・差し入れ(おみやげ)2件があり、合わせて提供しました。
- ・支出はもう少し抑えることが可能かと思いました。(→委員会補助金の節約)
- ・水道水(水栓の所在)確保ができず、市販水(自販機)を使用して支出が増えました。

④参加者感想

- ・盛会でよかったが、どうかたか全体の交流はちょっと出来なかった。
- ・大いにしゃべり食べました。楽しかったです。準備大変だったと思います。ありがとうございました。

<21 総学 臨時保育室の開設について>

①21 総学における保育室の開設と実施・利用実績

21 総学では参加者のための臨時保育を実施しました。

全日程について開設を企画しましたが、利用申込みが1件で、5歳児と学童の2名、9月4日(日)午前中だけの希望であったことから、同日9:15~13:15(分科会開催9:30~13:00)、4時間の保育態勢を取りました。

保育室は龍谷大学短期大学部のご好意で、会場キャンパス内の「子ども教育多目的室」を借用することができることとなり、備品設営・遊具の配置などが半日を過ごすには申し分なく、好条件でした。保育担当者には学生アルバイトを募集しましたが、夏休み入りでうまくいかず、利用者の方のご協力で、ママ友の保育経験者に依頼、子ども2人を連れて、引き受けていただきました。子どもたちは4人組なので、広い保育室(休日なので、建物内は閑散)にも臆せず、楽しく遊んでくれたと思います。利用者負担なしで十分な予算を組んでいましたが、保育者への謝礼のみ執行しました。

保険をかけましたが、保育についての保険は該当するものがなく、21総学参加者すべてが加入する形で利用しました(今回初めてだそうです。高齢の参加者も多いことから、万一の事故等を考えて、今後は踏襲されることとなるでしょう)。

②研究集会における臨時保育の課題—世話役としてどう考えるか

今回、21総学では、実行委員会における協議が遅れ、第3回実行委員会(6月19日)で設置を確認、第3サーキュラー(7月中旬配布)にはじめて記載されました(申込期限8月5日→19日に延期)。

研究集会や学会で「臨時保育」「一時保育」を開設することは、女性研究者支援・共同参画の一環として慣例化してきているようです。学会の場合、託児企業(NPOなども)への委託が多いという印象です。利用見込みが少ない場合、会場付近の託児室(一時預かりを受入れる)を契約することもあるようです。保育界の状況、とくに現在進行中の新制度のもとでは、公的保育への保育企業の参入が進んでおり、その足場をこれまでに築いてきたのは大学や病院などの職場保育所ではないかととらえられます。したがって、企業への委託は避けたいこと、会場キャンパス付近に適切な、信頼できる託児室を見出せなかったことから、今回の保育室は実行委員会の自主運営としました。結果的に利用希望者が少なく、幼児中心だったこと、短時間であったことから、準備の負担も少なく、無事に半日をしのぎましたが企画途上での難問は多々ありました。従来のデータが引き継がれておらず、女性研究者委員会のメールで石渡さんから過去2回ほどの準備と実施の経験についてお教えいただき、参考になりました。

前回・今回とも利用者は、ジェンダー分科会の報告担当者でした。その点で必要性は高かったというべきですが、若手研究者・女性研究者層の参加者増に寄与したかといえ、成果は見られません。保育室開設について、とくに配慮が必要なのは、3歳未満児の受託と長時間保育(午前・午後の全日)です。それらも念頭に置き、事務局(京都支部幹事会)では、以下の企画書等を準備しました。

- ① 21総学臨時保育実施要綱(開設日時・設営・備品・保育者・保育内容を含む)
- ② 21総学臨時保育の利用について—利用保護者の方へのお願い
- ③ 21総学臨時保育利用申請書(利用希望者名・子どもの年齢)(事務局長メールにて対応)

④ 21 総学臨時保育利用児童基礎票(当日用)(子どもの生活についての配慮事項全般)

以上を、今後の総学実行委員会に申し送り、開催地の保育事情等も勘案して、適切な保育形態を検討する上で参照されることを望みます。(文責・京都支部・清水民子)

2 2016年度 第1回女性研究者・技術者委員会 議事録

日時：2016年9月4日 17:00～18:50

場所：龍谷大学深草キャンパス 207 教室

議事

(1)委員会運営のための「申し合わせ」について

原案について、若干の字句修正を行った上で承認することとした。

連絡員の名簿整理を行うこととし、取りまとめを石渡副委員長に依頼した。

(2)来期に向けての委員会活動について

2018年開催予定の第22回総合学術集会にて、委員会主催の分科会をもつ。

2019年に「第15回女性研究者・技術者シンポジウム」を開催する。

(3)第21回総学「女性研究者・技術者委員会分科会」の振り返り

- ・参加者31名で、うち非会員は9名、1名から入会申込書を受け取った。他に少なくとも2名から入会の意思表示を得た。
- ・現地参加者が確保できた
- ・パネラーに若い人を配置したのは良かった
- ・4名のパネラーのスタンスが同じであったが、違いがあっても良かった
- ・パネラー、参加者ともに、しっかりした発言であった
- ・フロアーからの意見を得た分科会での議論は視野が広くて良かった
- ・公募、採用などの教員人事に男女の相違(格差)があるかもしれない。今後の議論に向けて、可視化する必要がある
- ・院生の立場では子どもの保育園措置が不利である。対策を考えたい。
- ・科学者会議全体としては「女性会員強化」の方針であるが、事務局から分科会には誰も参加していない。男性の参加も含めて、今後の方策を検討したい。

(4)その他

会計の節約により、総学分科会・交流会用の支出を予定額より低く抑えた。

次回委員会は11月または3月に東京で開催する。

3 日本科学者会議 女性研究者・技術者委員会運営のための申し合わせ

(2016年9月委員会承認)

1. 委員会の目的

日本の「女性研究者・技術者問題」の解決に向けて、必要な諸活動を行う。

2. 委員会の構成

①委員の決定と配置

- ・委員会委員は各支部活動の活性化と全国的な配置を配慮した上で、前年度委員会が次年度委員を自薦・多薦により選出する。委員人数は特に決めないが、前年度委員会が各年度ごとに必要人数を確認し、決定する。
- ・委員には若手研究者および院生が複数名、加わるよう配慮する。

②委員会組織

- ・委員会には、委員長、副委員長、会計を置き、全国常任幹事1名を委員会より推薦する。
- ・委員長は委員会での互選により決定する。
- ・副委員長、会計、全国常任幹事については委員長が指名／推薦し、委員会承認を得る。
- ・委員会ホームページ、メーリングリストの管理者を置く。

③委員任期

- ・委員の任期は特に設けないが、年度ごとに委員名簿を確認し、できる限り広い範囲の会員が委員になるよう配慮する。
- ・委員長の任期は2年とし、再任可とする。特段の理由がない場合には、2期(4年)を限度として交替する。
- ・副委員長、会計の任期は委員長の任期とずらして設定する。全国常任幹事の任期についても、委員長の任期とずれるように推薦する。

3. 委員会の活動

- ・女性研究者・技術者問題の解決に資する活動を随時、実施する。
- ・定期的活動としては、総合学術集会における分科会設置(隔年)、「女性研究者・技術者シンポジウム」(総合学術研究集会が開催されない年度に、おおよそ4年に1度の割合で開催)の二つを行う。
- ・委員長は定期大会、学術体制部会に出席し、委員会活動を総括する。
恒常的任務として、委員会活動の年度方針と活動計画の提案、年度予算の執行計画案の策定と確認を行う。活動計画と予算の執行状況について年度末に総括し、委員会承認を得る。
- ・副委員長は委員長を補佐する。
- ・会計は年度予算を管理し、単年度ごとに予算を立て、決算報告を行う。
- ・全国常任幹事は全国常任幹事会に出席し、幹事会決定等について委員会に報告する。女性研究者・技術者委員会の要望や見解等を常任幹事会に伝える。

日本科学者会議からのお誘い

日本科学者会議は専門を超えて議論・交流し活動する学術団体。ジェンダーに関する議論・研究も盛んです。皆さまのご入会をお待ちしています。ご友人にもお勧めください。

〒113-0034 東京都文京区湯島 1-9-15 茶州ビル 9F

Tel: 03-3812-1472 Fax: 03-3813-2363 アドレス: mail@jsa.gr.jp